

武蔵野日曜聖書講筵

天国体現

——マタイ伝第5章1～12節——

1993年10月24日

小池辰雄

山上の大告白 霊の貧しき者 キリストから無を賜る ゲーテとダンテ 自分をキリストの中に投げ入れる 神交 否定道・矛盾道・逆理道 未生道・象徴道・沈黙道 平安な魂は人を平和ならしめる

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。 汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

● 山上の大告白

今日は山上の大告白——普通は「垂訓」と言っていますけれども——キリストの告白のころをお話します。キリストは自分の体験しないことはひとつも語らない。我々もみな体験からものを言わないと、いわゆる研究ではダメです。いわゆる聖書の研究では、頭の話になってしまう。聖書は体験をもって読むべきものである。マルチン・ルターの聖書の読み方はまさにそうだった。

1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。

大勢、キリストを慕って、やって来たわけです。小高い所、多分、ガリラヤ湖の北の方



の丘の上でしょう。ガリラヤ湖が一望に見える所。「山上」というのは、そういった丘の上のことだと私は思う。その丘の上に登って坐った。弟子たちがみ許にやつて来た。これは当然来なければいかん。

² イエスをひらき、教えて言いたもう、

「教える」という言葉が使つてありますけれども、キリストの言葉は本質的には全部告白です。

● 霊の貧しき者

³ 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

「さいわい」というのは、「幸福」と書いてありますけれども、これは「恵福」でなければダメです。

「恵まれたるかな」

ということですが。「マカリオイ」というギリシヤ語も「恵まれる」意味なんです。

「恵福なるかな」

ということですが。福音の世界はいわゆるこの世の幸福とかしあわせとかいうのとは違う。恵まれるんです。神さまの恩寵おんちようです。

「心」は霊です。

「霊の貧しきもの」

ということ。キリスト自身が霊の貧しい方です。最も霊が貧しいのはキリストなんです。自分を何者ともしない。ということは神一切であるということ。

「オール オア ナッシング」(一切か無か)

ではなくて、

「オール イズ ナッシング」(一切即無)

です。神が一切であるからこちらはゼロなんです。

「恵福なるかな、霊の貧しき者」

ということ。神一切で、自分を何者ともしない。自分は空っぽで、全部神さまから完全に受けとっている。これができたのはキリストだけです。我々にはできない。だから、私はキリストのことを「無者」という。何も無いひと。無者は「無限無量者」ということ。無という字は実は無数という意味の字なんです。「天蓋の下に廿廿の林」、これは数えられない。無が即ち無数を表している。

自分が何も無くなると、キリストは神一切、父一切ですから、

「我何事をも為しあたわず。」

我は何をも教えることができない。

神さまが言えということと言っているだけののはなしだ。



神さまが為せということを、神の力でさせられているだけののはなしだ」と。キリストは無者だ。だから、無限無量者なんです。

●キリストから無を賜る

我々はキリストから無を賜る。自分では無になれない。キリストから無を、ゼロを賜る。無が恩恵なんです。こちらがゼロになると、今度は、キリストがグーツと入ってくる。

「信ずる」とは、「受けとる」ことです。信ずるとは身体で受けとること、体受すること。体受するとは、キリストを体受してキリストと、一つにされる。一如になる。これが本当の信仰の現実です。信仰の現実にはキリストと一つにならなければ、

「信じている」

だの、

「信仰」

なんていう言葉はダメなんです。そこには本当の力がない。そして、自分の信仰の力だと思つて一生懸命でやっている。ご苦労さんでくたびれてしまう。

我々は空気に囲まれて空気を吸っている。肉体は空気が一切なんだ。肉体の生命は空気が一切である。まったく空気というものは自然の恩寵です。空気がなければ、我々は窒息して死んでしまう。そして、空気は見えない。見えないけれども、充滿している。霊の世界もそうなんです。

十字架の贖あがないというのは、

「お前の自我というものを——人間はみなエゴイストだから、自我、エゴイズムというものを——全部、私は十字架で受けとつた。お前の自我は全部ここに受けとつてしまったぞ。相対的な人間小池が相変わらずダメでも、そんなことは心配するな。もう、ゼロをお前にやつたんだから、私を受けとりなさい」

ということですよ。それで、祈り入るから、力がくる。疲れを知らないような人になってくる。これは本当だからしょうがない。私は体験からものを言っている。頭でものを言っているのではない。

「千万人といえども、我往かん」

という、それだけの力が来ている。

そういう無即無限無量、「アミッターバ（無量寿）」ということ。私は「完全」という言葉は嫌いです。完全ということとはそれでお終いということ。完全ではない。無限無量です。限りない、終り無き生命です。私は死にません。終り無き生命で、次の世界に往生する、往きて生きる。それだけの烈々たる生命力をキリストからいただいている。

「我を信ずる者は、死ぬとも生きん」

という永遠の生命です。空元から気ではない。本当にそういう力が来ているんだから、仕方が



ない。

キリストはまさに、霊が貧しくて神一切だから、恵まれている。だから、

「恵福なるかな、霊の貧しき者、

という。ただ「心」ということではなく、霊なんです、魂です。自分を何ものともしない。そうすると、

天国はその人のものなればなり」

と。「天国」とは神さまの支配するところ。その人が神の支配するところの中に入ってしまっている。それが天国、神の恵みが太陽の光のように支配しているところですよ。

●ゲートルとダンテ

ゲートルという人は非常に太陽が好きな詩人でした。明るい詩人です。だから、ゲートルの『ファウスト』の一番先は

「ゾルネ（太陽）」

という言葉で始まっている。最後に、「ゾルネ」になっていないから、私は二行ばかり付け加えてやった。ゾルネで始まったら、ゾルネで終わらなくては。

ダンテの『神曲』が

「星（ステラ）」

で始まって、最後はやはり「星」で終わっている。ダンテは星の詩人、瞑想の詩人だ。ダンテは瞑想の夜の詩人、ゲートルはよくものを見る昼間の詩人。私はダンテとゲートルと両方とも非常に好きなんだ。それぞれの素晴らしい善さがわかる。

キリストを持つと、何でも包摂ほうせつできる。そして、その内容を本当の意味で把つかむことができる。

それはキリスト教的解釈ではない。無限無量のキリストの光によることの把つかみ方なんです。

「キリスト教」

ではない。私はキリスト教という言い方は嫌いだ。「キリスト」だけでたくさんだ。「教」ではない。

キリストは神さまと一如です。

「自分は何もできない。何ものでもない」

と言って平伏しているキリストは、神と一つになっている。だから、

「我を見しものは父を見しなり」

と仰った。だから、我々は

「我を見しものはキリストを見しなり」

と言えなくてはいけない。

「私の中のキリストが見えるか」



と、あなた方一人ひとりがはつきりとそれを言わなくては。
 「我がうちなるキリストを見よ」
 と。いわゆる信仰ではない。

「霊の貧者」

そうすると、そこに無限無量がくる。

「天国はその人のものなり」

と。神さまの支配する世界が天国。天国は、歴史の最後にくるところの新天新地も天国だけれども、今現に我々の中にやってくる天国です。

「天国は汝らのうちにあり」

とキリストが言ったのはそのことです。イエス自身が天国体です。我々も天国体でなければダメなんです。天国体、天国人。天も地もありはしない。天地融合の世界です。

●自分をキリストの中に投げ入れる

4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

イエスという方は人間のあらゆる面をちゃんと見て、そして

「どの状態においてもそこには天国がある」

ということを言いたくてしようがないんだ。

「どれもこれも感謝だ」

と。この「慰め」は神さまです。人の慰めくらいではダメです。

「その人を私が慰めてやるよ。悲しみの中に天的な喜びがくる。涙のかなたに虹が現ずるぞ」

と。空の涙は虹になる。どんな状態にあっても、キリストにすればいい。キリストに――祈り入るところでない――投身する。身体を投げ入れる。祈り入るところでなく、キリストの中に自分の身体を投げ入れる。

「主さまー」

と言って、自分をキリストの中に投げ入れる。お願いではない。

「あなたと一つにされたい!」

と。そうするとそこから、私の願いはキリストは知ってらっしゃるから、ちゃんと知らない間にそれをかなえてくださる。声を出す前の、

「声前の一言」

を神・キリストは知りたもう。心の中がキリストは読めるから。サマリヤの女との会話でもそうだ。

5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

権力者がみな地をつぐかと思つたら、どっこい、本当の神さまの大地は柔和な人が地をつぐ。



権力者ではない。強い者ではない。柔和な者、心の優しい、愛の人が地をつぐ。カール・ヒルティなんていう人はまさにそういった柔和な人の一人だ。『眠られぬ夜のために』はそういう人が書いた本です。

⁶ 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

「神の国と神の義を求めよ」

と、キリストの言にもあります。神さまは義の存在であり、愛の存在です。この義と愛は離すことのできない両面です。日本刀は鋼鉄と軟鉄からできている。そういうようなものです。

イザヤ書57章1節に、

「¹ 義者ほろぶれども心にとむる人なく、愛しみ深き人々とりさらるれども

義しきものの禍害のまえより取去るるなるを悟るものなし。」(イザヤ57・1)

ここに「義者」と「愛しみ深き人」という言い方がしてある。イザヤ書にはまだ方々にある。義と愛。義と恵み。愛も恵みも同じです。そういう言い方をしている。

イザヤ書51章5～8節、

「⁵ わが義はちかづきわが救すでに出たり。わがかいなはもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望み、わがかいなに依頼まん。⁶ なんじら目をあげて天を觀、また下なる地をみよ、天は烟のごとくきえ地は衣のごとくふるびその中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救はとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。……

義と救い一つ。義が救うのだから。神の義が救いなんです。ということは、神は義を与える。与えるから救いなんです。

⁸ そはかれら衣のごとく蠹にはまれ、羊の毛のごとく蟲にはまれん。されどわが義はとこしえに存らえ、わがすくい万代におよぶべし。」(イザヤ51・5～8)

義と救い一つになっている。審く義でなく、与える義です。だから、救いなんです。

キリストの義というのは、神さまとの関係が垂直に立っているのが義なんです。神・キリストが垂直に立つ。そして、これが一つになってしまう。そういうのが義の世界です。それが同時に救いの世界、愛の世界です。聖書では義と愛が離すことのできない事態なんです。審く義ではなくて、与える義です。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言った。

「キリストだけが義人だ」

というのは、神さまの義をいただいているから。ところが、キリストは

「自分は何ものでもない」

と言っている。だから、神の義をいただいているんだ。ゼロ∥無限大だから。



● 神交

「しんこう」は信じ仰ぐ(信仰)ではない。神さまとの交わり、「神交」です。我々の「しんこう」は神・キリストとの交わりの世界、一如にされている世界。これが神交の世界です。神さまが内住しているところ。キリストが内住してくださる。それが「天国」なんです。我々が天国体であるということは、キリストが内住して下さって、恵み的な存在として中に入ってくださいっているからです。

「我は門なり」

という。キリストは神さまからの門であり、神への門であるから、入っていけばいい。

6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

まったくそのとおりです。キリストという、義に飢え渴けば飽くことを得る。満腹してしまふ——満腹とはおかしな言葉だけれども——充滿してしまふ、あふれてしまふ。何でも、溢れなければダメだ。横溢する。泉のごとくになる。キリストは神という義に飢え渴いたら、飽くほど満ちたから。

イザヤ書51章の5、6、8節は義と救いが異語でありながら同義である。言葉が違うけれども、中身は同じなんです。イザヤ書はそういう意味で素晴らしい。義と救いが一つになっている。義が救いであり愛である。与えるから。審くのではない。

「憐れみは審きに打ち勝つ」

というようなのがヤコブ書2章13節に書いてある。

「¹³ 憐れみを行わぬ者は、憐れなき審判を受けん、憐れは審判にむかいて勝ち誇るなり。」(ヤコブ2・13)

とある。

● 否定道・矛盾道・逆理道

聖書ほど楽しい本はない。楽しくて、力がきてしょうがない。

「聖書は解釈が大変だ」

なんて、解釈なんてひとつも要らない。聖書の言葉に打たれていく。そのままだ。聖書註解なんて要らない。キリストの霊で読んでください、み霊の光で。

聖書の真理というものは、相対的な世界に対しては否定道です。

「彼にあらず、此にあらず」

ということ。

それから、矛盾道。

「彼にしてしかも此なり」

という。

「義人にして罪びとなり。罪びとにして義人なり」



とは矛盾なんです。矛盾の自己同一ということ。

それから、逆理道。逆理というのは

「彼なき此」

という世界です。例えば、

「片手の音が聞こえるか」

という。これが逆理道という。左なき右、右なき左。みなこれは聖書に当てはまる。

●未生道・象徴道・沈黙道

未生道。未だ生ぜざる道。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬ前の父をしぞ思ふ」

これが未生道という。

象徴道。ジンボール（象徴）です。

「彼の如くまた此の如し」

という。無限の暗示を与えるものです。「即如」という。

沈黙道。

「彼我黙す」

という。彼も此も黙っている。絶言絶慮です。

●平安な魂は人を平和ならしめる

7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。

8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

まったくそうですね。純一無雑な心のことです。

9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

平和ならしむるためには、その人はまず平安でなければダメです。神・キリストとの関係がちゃんと立って、一如の世界に入っている。それが平安です。平安というのは力のある静けさです。平安は力を持っている。不動なんです。平安の縦の関係があつて、平安である魂は人を平和ならしめることができます。

平安がなければ、「平和運動」なんかいくらやったってダメです。平和は横の関係、平安は縦の関係。縦の平安がなければ横の平和は成り立たない。いい加減な平和ではダメです。陰ではまた武力をつくっている。

絶対無力なのは幼児、赤ん坊です。サタンもこれを殺すことをしない。本当の無力なるものは、それを殺さない。いい加減な力があるものだから、やつつけられる。だからどのみち、無の世界は素晴らしい。

我々のいろいろな才能、知識、能力、それはみな賜りたるもので、本来は無である。賜



りたるもの、育てられたるもの、鍛えられたるものです。小学校からの教育を考えると、たくさん之恩を受けた先生方がいますよ。

10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。まさにそうですね。神の義のために責められたる者。これは殉道の人です。

11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。12 喜び喜び、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

非常に力強い、慰めの、励ましのキリストの言葉ですね。キリストの言葉は何回も繰り返して読んでみると、身にしみてきます。それでいいんです。身にしみて身体の一部になつて——それが天国体現ということ——そういった天国的な消息が身体でもって現るようなことが本当にキリストの言葉を受けとることだから。そこで私は今日は

「天国体現」

と題に書いた。こういうキリストの言葉が全部体現されるような人にならなくては、キリストの言葉を本当に受けとっていることにならない。

この「恵福なるかな」は数えると、八つある。「恵福八相」という。預言者、使徒、我々、みなそうです。キリストにあつては同種類、同質なのが、本当のキリスト道の人です。キリストの霊が止まつている、宿つている。それを霊止ひとという。私たちはそういう霊止である。キリストの霊がうちに内住している、我々はそういう霊止なんだ。

恵福八相。そうすると天国が自ずから体現される。ありがたいはなしです。とにかく、キリストの言は力強い。そして、本当に力を与える。慰めも励ましも力も与える。だから、聖書ほど楽しい本はない。大変な本だね、正直。権威と慰めと励ましも力をもっている。だから、

「わが言は霊なり、生命なり」

なんだ。

「意味ではないぞ、霊であり、生命であるぞ」ということです。

